

## 保育の環境が纏<sup>まと</sup>う「時の経過」

松島のり子  
(大学教員)

### 「環境」の捉え方

形があるものも形がないものも、すべての存在は、「時の経過」を含んで存在する。例えば一枚の紙も、紙となる前には、原料となる植物が育ち、紙として加工されていく過程がある。紙となった後には、誰かが文字を書き、それが大切に残されていくこともある。このように考えてみると、無機質に思えるものも、人の手が加わって形を成し、その後も続くさまざまな過程を思い浮かべることができるとは思えないだろうか。「環境」の捉え方を深める

ことは、子どもを育む豊かな保育の環境の創造につながり得る視点の一つであると考ええる。

筆者はこれまで、保育を学び、保育を実践し、保育に関する授業に携わってきた。学生として保育を学ぶ中で、「環境」の捉え方が広がった。保育者として実践する中で、「環境」を通して行う保育と、その営みの中で人間が育つことを実感した。教員として講義を担当させていただくようになって以来、日々の生活の中で「環境」を意識することが増えた。

また、一研究者としては、保育の制度や政策の歴史研究に取り組んでいる。歴史をひも

松島のり子(まつしまのりこ)  
福山市立大学教育学部講師。専門：幼児教育学、保育制度・政策の歴史。著書：『「保育」の戦後史 ― 幼稚園・保育所の普及とその地域差』(六花出版 2015年)。

ところがすると、残されたさまざまな史料との対話を通して、当時を生きた人々の様子や思いをうかがい知ることができる。

こうした経験を振り返りつつ、改めて保育の「環境」に思いをめぐらせる中で、形はなくても人間の発達に影響しているであろう、環境が纏う「時の経過」について考えてみたいと思に至った。

## 自然の中で

筆者が保育を学んだお茶の水女子大学附属幼稚園の園庭の「お山」には、大きなイチヨウの木が、幼稚園の生活を見守るように佇んでいる。かつて倉橋惣三は、「大銀杏と藤棚とは、お茶の水幼稚園の二つの大切な自然の魂である」と記した。夏には青々と葉が茂り、秋には黄色に色づき、冬になると葉を落とし、春が訪れる中で再び葉をつけていく。お山のイチヨウの木は、背丈が高くなり、幹が太く

なり、樹齢を重ね、そして、幼稚園の中に守られながら、時を過ごしてきた。その歩みの中で、子どもたちとのさまざまな出会いやかわりがあったことが想像される。

また、お茶の水女子大学には、正門から講堂に続く道にイチヨウ並木がある。この道を、十一年間通い続けた。現在のキャンパスは、関東大震災後の一九三二年に御茶ノ水から移転してきたものである。大学の正門が完成したという一九三六年六月の写真には、若かりしイチヨウの木を見ることができ

る。平山許江によれば、「日常のありふれた風景は環境の根幹となり、その人の精神の中核をつくり、環境は人の心にもはたらきかけている」とい



▲「正門」（お茶の水女子大学デジタルアーカイブズから）

くても、道に落ちたギンナンの実やその匂い、黄色の落ち葉がじゅうたんのように一面に広がる様子から、ふと季節の移り変わりや自然の魅力に気付くことがあった。このイチヨウの木々にも、今に至るまで、そしてこれからも続く「時の経過」がある。決してイチヨウのほうから積極的に働き掛けてくるわけではないものの、そこにある限り、見る人や近くを通る人の感覚に響き続けていくのであろう。

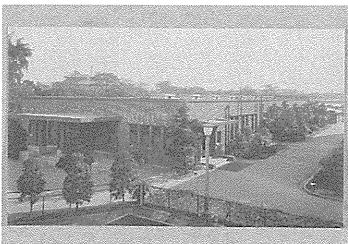
## 施設や設備の中で

お茶の水女子大学附属幼稚園の現園舎は、一九三一年に竣工し、翌一九三二年十二月に移転が実施された。一九三三年より保育を開始して以来、子どもたちが生活し、保育者が保育を営む場であり続け、現在に至っている。園舎の周りの風景は変わっても、園舎自体は、移転当初の面影を残している。<sup>注2</sup>二〇一三年には、登録有形文化財として「文化的価値を高

めていく」ことと、「生き生きとした保育活動がより一層展開されていくための改善」を目的として、園舎の大規模改修工事が行われた。工事を経て、「大切に引き継いだものと新しく工夫したところが溶け合」う幼稚園<sup>注5</sup>となった。

園舎に限らず、玄関を入れて真つすぐにながる廊下、その先にある遊戯室、各保育室のステンドグラス、保育室内の棚、机や椅子、窓枠、保育室と園庭をつなぐ三和土<sup>たたき</sup>、その間にある数段の階段、階段横の手すり、園庭の遊具や砂場など……、そこかしこで園舎が歩んできた「時の経過」を感じ、新旧が共存する中に醸し出される、お茶の水女子大学附属幼稚園ならではの雰囲気<sup>注6</sup>に接することができる。

これまで、附属幼稚園に関する戦前、戦中、



▲「附属幼稚園正面」（お茶の水女子大学デジタルアーカイブズから）

戦後の写真を見る中で、そこに写る、切り取られた場面は確かにそれぞれの時代の出来事でありながら、現在も同じように目にすることのできる景色に出合ってきた。幼稚園の施設や設備に刻み込まれ、染み込むように息づいている歴史や、その時を生きた人々の足跡があることを感じていた。

新たに始まり、確かに歩まれてきた「時の経過」は、園全体や園生活を包み込むように環境を成す一部となり、園の雰囲気や風景をつくり出す。それが保育の環境となつて、幼稚園で生活する子どもたちの「心にもはたらきかけて」いた(る)のではないか。きつと、日々保育を実践する先生方の心にも、感覚に響くものがあるのではないかと予想する。いつか、先生方にお話を伺つてみたいと思つている。

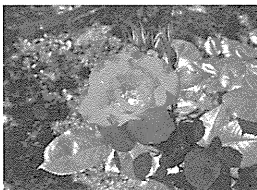
## 地域の中へ

二〇一五年四月より、縁あつて広島県福山

市で生活している。福山市は、今年二〇一六年七月一日に市制施行一〇〇周年を迎えた。

福山市では、「市の花」の一つに「バラ」が制定され、市民にも親しまれている。市内には各所にバラが植えられており、シンボルや施設の名称としても、よく目や耳にする。また、市では「思いやり 優しさ 助け合いの心」を表す「ローズマインド」を育むことが目指されている。戦後復興を遂げる中で、一九五六年に、市民と行政が協力してバラの苗を植えた。このことを契機に、「ばらのまち福山」としての歴史が始まった。<sup>※6</sup>

地域には、地域が歩んできた固有の歴史がある。福山市において、バラは「日常のありふれた風景」の一つとなっている。こうした環境が、地域や「土地柄」をつくり、地域に生きる



人々や子どもたちに、植物に触れて自然の恵みを感じたり、人としての心もちを考えるきっかけとなったりと、さまざまな形で働き掛けていると考えられる。

## 保育の環境が纏う「時の経過」

「時の経過」は形がなく、意識されにくいかもしれない。しかし、あらゆる存在が纏っている。それが、保育の環境としての意味を持つて、人間の発達につながり、影響する面があると考える。前出の平山によれば、「子どもは常に身体感覚のすべてを使って対象とかわり、対象の全体をまるごと受け止めている」という。子どもは、こちらが考える以上に、環境が纏う「時の経過」の働き掛けを感じているかもしれない。

保育の環境は、人為的意図的に構成される。それが「時の経過」を纏うからこそ、意図を越えて人間の発達に影響を及ぼし得るものが

あると考えられる。そうした環境の働き掛けを、子どもたちや保育者がどのように受け取っているのかということも含め、今後も追究していきたいと考えている。

## 注

- 1 倉橋惣三「子供讃歌（二四）」『幼児の教育』第四十九巻第十二号 一九五〇年 p.35
- 2 お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ「新校舎に学ぶ」（一九三六年十月）  
<http://archives.cf.ocha.ac.jp/pic010-shinkousha.html>
- 3 平山許江「領域研究の現在〈環境〉」萌文書林 二〇一三年 p.37
- 4 前掲書「領域研究の現在〈環境〉」p.39
- 5 宮里晁美「大規模改修工事の中で—子どもたちと創り上げた工事中の保育—」『幼児の教育』第一一三巻第四号 二〇一四年 p.70
- 6 福山市「ローズマインドにこころ」  
<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/rosetownfukuyama/22390.html>
- 7 前掲書「領域研究の現在〈環境〉」p.137